

序

文

『戦争と経済』に序す

苦 米 地 英 俊

明治の元勳木戸松菊が憂國の感懷を賦した詩の一節に、世難多年萬骨枯。廟堂風色幾變更。年如流水去不歸。人似草木爭春榮。邦家前途不容易。といふのがある。

星移り人替り、昭和の聖代となつたが、今も尙、公と同じ憂國の情をわかたぬ者とはあるまい。

聖戰將に五星霜、大陸の野に枯骨を埋むる忠勇の將士そも幾萬ぞ。今や皇軍の武威四海を風靡するの慨あるも、時局益々紛糾、太平洋上暗雲低迷して、

暴雨將に至らむとして風樓に充つるを思はしむ。

長期防空演習下、寒燈のもとに靜座、沈思して將に筆を執らむとするとき、秋夜蕭々、斜風細雨、忽ち驚く闇を破る近衛内閣退陣の報。事變下廟堂の風色は雷に幾變更のみに止まらず、政變を重ねるそも幾度ぞ。想ひは期せずしてこゝに走る。億兆一心の要、實に今日より急なるはない、而も事變處理につき異論百出、之また至誠憂國の奔、蓋し是非すべきにあらざるべしと雖どもこれ決して好ましき事ではあるまい。

年はげに流水の如く去つて歸らない。尊き時を買ふために安き油を日本に賣つたとル大統領はいふ。その言や誠に三思に價する。總て物事には時期がある。鐵は灼熱してゐる間に打たねばなるまい。人は草木に似て春榮を争ふが故に事が纏れる。そのために和を失し機を逸するが如き事はよもあるまい。併し國民の杞憂はやるせなきまでに昂まる。口に公益優先を説き、行に私益

を包藏してはならぬ。時局便乗の徒輩果してありやなきや。

今客觀的に世界情勢を望見するに、邦家の前途誠に容易ならざるものがある。軍事については國民は當局に信頼し安心して然るべきも、事一度銃後國民の經濟生活に及ぶとき必ずしも樂觀のみは許されまい。燦とて輝く二千六百年の歴史を誇示する國民でありながら、遵法精神を強調せらねればならぬ今日の事態、誠に悲しむべきではないか。これは畢竟するに、思想が混濁し、國民道德が遅緩し、近代科學も亦我が國風に醇化せられてゐないためである。併しこれも我が國が明治以來急速な進歩を遂ぐるための已み難き餘弊の一つと見るべきであらう。

昭和六・七年の頃より準戰時下態勢の國情に即應してか、統制經濟に關する論争が華やかなりしことを想起する。今にして思へば、思想的背景を巧に迷彩せる論争、かゝる思想動向を精算し得ない立論、若くは不知不識の間に之に

染汚せる理論等の數々が散見せられる。これが爲に眞摯な研究、國風醇化に徒らなる累を及ぼしたる所なきか。

支那事變勃發の後、統制經濟は論議の域を脱して實施の時代に移り、次第に強化せられて今日に及んだのであるが、其の本質論に至つては今も尙歸一するところがない。而してその内容を考査し、又技術的方面を觀察するに、決して完璧とは稱し難い。所詮過渡的一階段でしかあり得ない。

現時舉國推進しつゝある東亞共榮圈の建設途上に横はる國際的障害は結局事態の落付く處まで行かなければ收まらぬものと外考へられない。之は長期を意味する。若し果して然りとするならば一刻も速に現階段を經過して國民をして本然の姿に歸らしむる研究が緊喫であらう。而して若し萬一更に勝れたる轉換の方途があり得るとしたならば一日も早く之を探究し、之に移行する準備手順も極めなければなるまい。苟も今日學に志すものは必ず憂國の士

たるべく、其の任務遂行に當つては不惜身命の覺悟があらねばならぬ。

此の故を以て我が綠丘學園に繋がる學徒が先般來「戦争と經濟」なる題下に各専門の立場より、熱烈眞摯、不退轉の努力を以て之を研究し來り、今後も尙も引き續き之を繼續することになつてゐる。時恰も本年は學園創立三十周年に相當するを以て、記念事業の一つとして、既に今日迄に得た成果の一部を「商學討究」特輯號に集録することゝした。

若し夫れ本誌に收むるところにして聊かたりとも斯界に貢獻するあらんか、これ全く望外といふべく、又若し未だ到らざるあらんか、更に一層奮勵して將來の大成を期せんとす。先進の諸氏幸に高教叱正を惜む勿れ。

昭和十六年十月十六日